

慶長期の江戸城 ～「慶長江戸図」・「江戸始図」の再検討～

齋藤 慎 一*

目次

はじめに

- 1 慶長・元和期の普請
 - 2 「慶長江戸図」の江戸城本丸
 - 3 家康以前の登城路と正面
 - 4 慶長十一年以前の江戸城
 - 5 天守と殿舎
- おわりに

キーワード 慶長 江戸城 馬出 天守 大手

はじめに

徳川家康は天正十八年（一五九〇）の小田原合戦後に関東へ入封した。江戸を本拠とし、文禄年間（一五九三～九六）に江戸城を改修する。当時は豊臣大名徳川家の段階であり、改修を経たとしても今に見ることができる將軍の城である江戸城とは比較にならない規模であつたろう。その江戸城が本格的に改修されるのは、徳川秀忠が將軍となつて以後の慶長十一年（一六〇六）からである。

近世江戸城に関する絵図や絵画は多数ある。ただし、そのほとんどは寛永年間（一六二四～四四）以後であり、元和年間（一六一五～二四）

以前の様相を語る絵図や絵画は極めて少ない。この条件のなかで、当該期の様相を語る絵図として都立中央図書館所蔵「慶長江戸絵図」（請求番号A11-1/東A11-001）が引用され、紹介されてきた。

平成十九年（二〇一七）二月、後述する松江歴史館所蔵『極秘諸国城図』所収「江戸始図」（以下、「江戸始図」と略す）が発見、報道された。これを契機として、同図を含め「慶長江戸図」¹を検討する機会を得た。本稿はその報告である。

さて、「慶長江戸図」については、以下のような見解があつた。

まず、『古板江戸図集成』第一巻（古板江戸図集成刊行会編一九五九、ただし、同会編二〇〇〇を参照した。）の解説である。同書においては、「後年、作図上進歩した技術を応用して、当時の形を再現するために描いたもの」であるが、「その内容は完全に当時のものに成りきっている。当時、徳川政府が、江戸図を作つて官庫に納めて置いたと伝えられるのが、この図の原図ではないかと思う」とし、「作図の動機は単に、大小名への賜邸の控え図であつたと思われる。年代も慶長十三年図として取扱つてよいと思う」と解説する。通説の見解はこの解説に基づいている。この見解を引き継ぎ小松和博は江戸城本丸の広狭に注目し、描写の差異を指摘している（小松一九八五）。

本格的に「慶長江戸図」を分析したわけではないが、村井益男は小松による元和八年（一六二二）の江戸城本丸拡張説（小松一九八五）に触れ、同図の史料性に警鐘をならした（村井一九八六）。村井は「そこで問題は、

* 東京都江戸東京博物館学芸員

『慶長十三年江戸図』の史料性格にかかわることになるが、基本的に後世の写図であるこれらの初期江戸図についてはなお検討を要すると思われるので」と論じ、写図であることに注意を払い、慎重な姿勢を示して、絵図の史料性格について否定的見解を述べている。慎重な姿勢を保持する村井は、発表の年次は前後するが『江戸城 將軍家の生活』（村井一九六四）においても「慶長江戸図」について触れていない。

なお、上記の村井論考を所載する『日本名城集成 江戸城』（村井益男編一九八六）の巻頭図版では、「本図はその作成形式からみて後年の実測図をもとにした復原図であるとの見方が強いが、そうだとしたとしても復原資料は13年当時のものを用いたと考えてよいであろう。」という解説を付している。当時の通説的な認識を継承しているとして理解したい。

「慶長江戸図」の史料性格について踏み込んだ発言をおこなったのは飯田龍一・俵元昭であろう（飯田・俵一九八八）。同図の解説として以下の点を指摘している。

○「屋敷の所有権、といっても正確には、屋敷地は幕府に賜与されるものだから入居権というべきかもしれないが、そうした権利を示す一種の沽券図に似た機能をはたす制作目的があった図と考えるほうが適切」とする。

○「このころに流布した図は、おおむね見取図的であって、特別の例外である『正保江戸図』を除いては、延宝末（一六八〇）年ころまで、測量と呼べるような技術をもちいて作ったように見える地図はなかった」というのが通説であるが、「慶長江戸図」の存在から「江戸時代の、地図制作技術は、その初頭からきわめて高度であったもので、それが、幕府から民間へ流出してくる期間に、相当のタイムラグがあったという仮説が成り立つ」と述べる。

これらの指摘は「慶長江戸図」の基本的な性格に踏み込む重要な発言である。

以上の研究の延長線上に千田嘉博の研究は登場する（千田二〇〇〇）。千田は「写本によってかなり重要な部分の記載に異同があり検討を要する。また史料の信憑性も問題となる」と注意を促しつつも、「かなり詳細に城郭中心部の姿を描く」と絵図の情報について肯定的に評価する³。以上の論者による指摘を概括すると以下ようになる。現状の研究史の到達点である。

- （1）基本的に写図であり、異同もあることから注意を要する。
- （2）測量技術を踏まえた早い段階の絵図。ただし、測量図となった段階は、原図の時点とするか、あるいは後年の写図作成の時点であるとするかで見解が分かれる。
- （3）原図に記載された内容は慶長期の情報であり、それは写図に反映されている。
- （4）原図は一種の沽券図のような、大小名への賜邸の控え図ではなかろうか。
- （5）原図は、幕府が作って官庫に納めて置いたと伝えられる地図の可能性はある。そして、原図の段階で測量図とする見解においては、作成で培われた幕府の技術が民間へ流失するまでにタイムラグを想定する。

概して、写図としての危険性を認識しつつも、その情報を肯定的に考えるという現状にあると言ってよからう。

そのような研究状況のなかで、「江戸始図」が登場した。鑑定にあたった千田嘉博は自らの見解を報告し、その内容はその後の展覧会や書籍などで発表された。まず「江戸始図」は千田が指摘するように、以下の点から「慶長江戸図」との関連が指摘できる。まず描写する江戸城の範囲が一致すること、後述の千田論点③にある「本丸北側の丸馬出」が記載されること、城下に記載される屋敷主が一致すること、などの点である。細部については後述するように異同は存在するが、おおむね同じ系統に

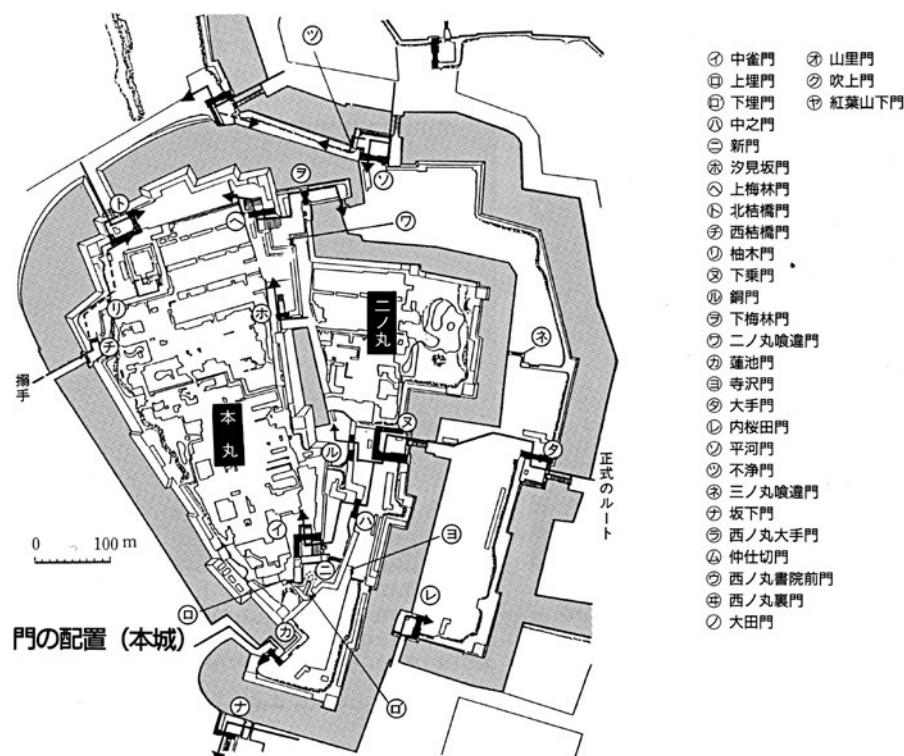


図1 江戸城 門の配置 (本城)
 (歴史群像 名城シリーズ『江戸城』(学習研究社2000)より)

属する写真である。このことをまず確認しておきたい。

逆説すれば、従前の研究史を踏まえ、「慶長江戸図」と「江戸始図」を比較検討することにより、「慶長江戸図」の史料批判がより可能になった。これにより「武州豊島郡江戸庄図」以前の徳川秀忠期の江戸城の姿が検討可能になったのである。したがって、「江戸始図」だけを取り上げて評価するのではなく、他の「慶長江戸図」と比較し、一連の絵図のなかに位置づけ、「江戸始図」を含む「慶長江戸図」の全体像を把握することがまず重要となる。

検討に先立って、まず千田の「江戸始図」に関する主たる論点に注目したい(千田・森田二〇一七)。注目すべきは下記の三点である。

① 天守の形式

・「本丸内部で第一に注目すべきは天守群です。現在の江戸城の本丸は中に天守台だけがぼつんとありますが、「江戸始図」が描いた慶長期の江戸城では、連立式の天守群を構成していて、想像を絶した堅固な構えになっていたと確認できます。」

・「慶長期の江戸城の大手守が単立したのではなく、姫路城のように連立式天守であったと確実になったからです。」

② 本丸南側の五連統外枳形

・「江戸城の南側のいわゆる大手筋の出入り口部分ですが、ここでは西国風の外枳形を、5段連ねていました」⁴。

③ 本丸北側の丸馬出

・「天守曲輪の裏手は、3連の丸馬出しによって守っていました」⁵。

以上の論点から、「江戸始図」が描いた江戸城は、数次の普請でほぼ完成した慶長十二年(一六〇七)頃の姿で、すでに述べたように、天守が連立式天守であったように、一般にイメージする江戸城とは大きく異なっていました」と結論づけている。

とりわけ①と②の論点は話題性が高く、マスコミを通じて広く宣伝さ

れたが、問題は「江戸始図」の分析だけで、千田が論じるような点が導き出させるかにある。その評価を考えてみたい。

その際の糸口を、本稿では千田論点②に求めてみたい。そもそも江戸城の大手筋は大手門・内桜田（桔梗）門―大手三之（下乗）門―中之門―中雀（書院）門である（図1の⑦・⑧・⑨・⑩の道筋）。「江戸始図」には明らかにこの道筋が記載されるが、千田はこの大手筋とは異なる大手筋として五連続外枳形⁶を設定する。しかし両者の関係には触れていない。この点にまずは問題意識をもちたい。

1 慶長・元和期の普請

「慶長江戸図」の記載と対照されるべき修築は、慶長期から元和期にいたる。この間の経過について、野中和夫の研究に拠って、概略を確認しておきたい（野中二〇一五）。

慶長八年（一六〇三）、徳川家康が征夷大將軍に任命されると、江戸城の大改修が計画される。諸大名を動員した公儀普請が開始されるのは、準備段階を経た慶長十一年になる。この時点で、將軍職は嫡子秀忠に継承されていた。準備段階のなかでは慶長九年に修築が発令され、石材の調達が始まる。

慶長十一年に本格的な工事が開始され、この年は本丸御殿、天守台石垣、本丸廻りの石垣、虎ノ門などの外郭石垣修築が実施された。

続く慶長十二年では、前年の工事を引き継ぎ、かつ堀普請が行われた。おそらくこの時点で、次の普請まで時間が空くため、本丸周辺の工事が一段落したものと推測される。

慶長十六年には西ノ丸の修築が実施された。

慶長十九年はやや大規模な普請が実施されたもようで、本丸石垣、後の時代の二ノ丸・三ノ丸の石垣および枳形門、西ノ丸大手門前の石垣、

桜田・日比谷周辺の石垣が普請された。

元和四年（一六一八）には西ノ丸の堀、半蔵門、東照宮の造営が実施された。

元和六年は慶長十九年工事が大坂陣のため中断したため、その継続工事が実施されたとされる。大手枳形門はこの年に普請されている。

元和八年には本丸御殿と天守台の改造が目的とされる工事が実施された。ちなみに小松和博はこの時に本丸が北側に拡張され、北側の馬出が消失したと考えている（小松一九八五）。また、「慶長江戸図」に描かれる天守台は慶長十一・十二年に普請されたものと考えられており、元和八年に元和度の天守台が普請されたのであれば、この天守台記載からも一連の「慶長江戸図」は元和八年以前の様相を描くといえる。

慶長十一年（一六〇六）から元和八年（一六二二）の十六年間の修築であるが、概して石垣を導入した城館へと江戸城は大きく様変わりしていくことになる。通説の修築状況は、「慶長江戸図」がこの間の様相を描いていることを示唆している。

2 「慶長江戸図」の江戸城本丸

「江戸始図」の発見にともなって「慶長江戸図」の再評価が行われるようになった。対象となる「慶長江戸図」の伝存であるが、現状では十機関で十五点の写図を確認した⁷。従前は都立中央図書館所蔵本が広く引用されていたが、以下のように写本が流布していることはさほど知られていなかったのではなからうか。掲載以外にも伝存する可能性は高いが、把握した範囲で閲覧し、後述するように大手道を中心に本丸付近に絞って、分類した。その概要が下記の一覧表である。

まず全体を概観して、「慶長江戸図」として概括する共通点を指摘しておきたい。

表 「慶長江戸図」一覧表

グループ	所蔵名称	所蔵	請求番号	寸法	備考
第1 グループ	慶長江戸絵図	国立公文書館	177-554	縦87.6cm 横95.2cm	
	慶長江戸絵図	東北大学図書館狩 野文庫	3-8827-1	縦83.0cm 横94.5cm	
	慶長年中江戸図	古河歴史博物館鷹 見文庫	鷹見泉石関係資料 絵 図地図278 (H330)	縦83.0cm 横94.0cm	
第2 グループ	慶長江戸図	国立公文書館	177-552	縦86.2cm 横80.3cm	
	慶長江戸之図	東京都立公文書館	654-05-01-05	縦91.5cm 横79.1cm	
	慶長江戸絵図	東北大学図書館狩 野文庫	3-8828-1	縦94.0cm 横87.0cm	
	慶長江戸図	東洋文庫	3-H-d-ろ-1	縦91.2cm 横80.7cm	付属あり ⁸
第3 グループ	慶長江戸絵図	東京都立中央図書 館	A11-1/東A11-001	縦80.6cm 横81.7cm	『古板江戸図集成』 所載 ⁹
	慶長江戸図	東京都立中央図書 館	A11-4/東A11-004	縦79.5cm 横78.2cm	
	江戸古図	三井文庫	三井C601-9	縦83.1cm 横81.5cm	
第4 グループ	江戸絵図	宮内庁書陵部	208-102	縦165.5cm 横106.5cm	彩色 別冊で「江戸絵図 付考」 ¹⁰ が付属す る。
	慶長江戸図	東京都立公文書館	654-05-01-06	縦171.0cm 横115.0cm	彩色
	慶長江戸図	東洋文庫	3-H-d-ろ-1	(上部) 縦79.3cm 横94.5cm (下部) 縦79.8cm 横94.5cm	墨書二舗一組 ¹¹
	慶長江戸図	西尾市岩瀬文庫	子92	縦162.3cm 横97.0cm	墨書
第5 グループ	『極秘諸国城図』所 収 江戸始図	松江歴史館		縦27.7cm 横40.0cm	

（共通点）

○江戸城のいわゆる本丸・二の丸・三ノ丸・北の丸・西の丸を中心とした江戸城中核部を同じ形状で描く。

○本丸のほぼ中央西寄りに天守を描く。

○本丸の北側には馬出（門の前面に防御のために配置され、堀・土塁などに囲まれた小さな空間）が連結して配置される。



図2 「慶長江戸図」東北大学図書館所蔵（3-8827-1）

○第1グループ（図2参照）

一般に江戸城の登城路は、大手門・内桜田（桔梗）門―大手三之（下乗）門―中之門―中雀（書院）門とされる。本グループでは中ノ門（図1の㊦）が描かれていない。このことが大きな特徴である（図3参照）。中ノ門が設置される以前の虎口は、本丸南側は後に中ノ門の位置の西側で、本丸富士見三重櫓の東に位置する下埋門が通路であったと考えられる。この点は千田も指摘する。したがって、第1グループの「慶長江戸

年代は慶長十二年以後、本丸が拡張されて北側の馬出が消滅する以前（小松説では元和八年（一六二二）の間となり、絵図ではこの間が五段階に分けられることになる¹²）。

そこで、大手筋に注目して「慶長江戸図」を分類する。その記載からまず次の五グループに分類したい。



図3 「慶長江戸図」中ノ門付近部分
東北大学図書館所蔵（3-8827-1）

これらの視点を「慶長江戸図」の範疇を示すメルクマールとしておきたい。

「慶長江戸図」が一覧表のように分類される論点は、江戸城の大手筋に関わる。この大手筋を視点として「慶長江戸図」に描かれる江戸城本丸の構造に注目すると、同図においては本丸の変遷が描かれていることに気づく。結論を先取りすると、当初は北を正面にした構造であったが、後に正規の本丸登城路となる門と道筋が確定してゆく。その

「図」は正式な登城路が設定される以前の状況を示している¹³⁾。
また、本丸塁壁のみが石垣で表現される。本丸東側の塁壁は折歪の石垣であり、この点の描写は次の第2グループと大きく異なる。両者のメルクマールの一つにこの塁壁の表現を考えておきたい。なお二の丸塁壁は土手の状況を描き、石垣が普請されていないことを示している。
同じ系統の写図は古河市歴史博物館と国立公文書館が所蔵する。ただし、古河歴史博物館所蔵図は中ノ門の位置にブロック状の記載が一個だけ記載される。あるいは第2グループへの過渡期に位置づけられる図か



図4 「慶長江戸絵図」 東北大学図書館所蔵 (3-8828-1)

（図5参照）。記載の意図は不明であるが、あるいは中ノ門建設にかかわる可能性がある。先に古河歴史博物館所蔵図を過渡期と表現した点はこの点にかかわる。
○第3グループ（図6参照）
従前より「慶長江戸図」として紹介され、一般的に知られている都立中央図書館所蔵の写図を含むグループである。
このグループで注目したい点は大手・中ノ門の位置に堀を渡る橋が描かれ、通路として成立している点である（図7参照）。次の段階でこの堀は埋められるので、本格的な櫓門が建築されていたかはわからないものの、おそらくは中ノ門の前身となる門も構えられたと推測される¹⁴⁾。大手三の門―中ノ門の登城路は確定できる点が重要である。しかしながら中雀（書院）門（図1の④）が明確となっていない点には注意を払いた



図5 「慶長江戸絵図」 中ノ門付近部分
東北大学図書館所蔵 (3-8828-1)

もしれない。

○第2グループ（第4図参照）

依然として中ノ門が描かれておらず、かつ本丸内の殿舎などの記載情報はおおむね第1グループと同じ状況である。ただし本丸東側塁壁の折歪で描かれず、緩やかな曲線で描かれる。この点を実際の石垣の状況に比して著しく異なった描写と考えられる。

このグループで注目しておきたい点は、中ノ門の場所に互い違いに配置された二個のブロック状の記載があることである



図6 「慶長江戸絵図」都立中央図書館所蔵（A11-1/東A11-001）

い。したがって登城路が成立する過程と考えられる¹⁵。

また本丸内の殿舎などの記載情報や二の丸の墨壁は土手の状況はおおむね第1・2グループと同じ状況である点も重要である。

○第4グループ（図8参照）

第3グループと同様に中ノ門が確認されるとともに、中雀門（書院門）もやや後世と形状が異なるが枡形門として存在が確認できる（図9参照）。ほぼ大手門・内桜田（桔梗）門―大手三之（下乗）門―中之門―中雀（書院）門の登城路が確定した段階と考えられる。



図7 「慶長江戸絵図」中ノ門付近部分
都立中央図書館所蔵（A11-1/東A11-001）



図8 「慶長江戸図」
東京都立公文書館所蔵（654-05-01-06）

ただし本図は地図の様相が他のグループと大きく異なる。本丸を含むおよそ江戸城の東側のみで、西の丸を含む南西側、さらには北の丸が描かれていない。言い換えれば、北西を天とした場合の「慶長江戸図」の北の丸付近を除く右側半分しか描かれていない。

ところが、対象地が半分にも関わらず、描かれている部分の面積は縦横の寸法がおおよそ二倍となっており、より精細な地図といえる。

北の丸付近の記載が無いこと

から、単純に絵図左側の南西部分が欠損した原図を写したとは思えず、変更があった北東側を意識して、描写範囲を限定して描いたと考えるのが妥当であろう。描写の中軸には中雀（書院）門から常盤橋門に至る大手道が据えられている。先に指摘した大手門からの登城路が確定したことが関連していることが予想される。

なお、『慶長年間江戸図考』¹⁶が掲載する絵図は、本図と同じ範囲を描く。あるいは原図を同じくするのであろう。

○第5グループ（図10参照）

このグループに属する絵図は「江戸始図」のみである。第4グループの様相を引き継ぎ、かつ中雀門（書院門）が明確に枡形門で描かれる（図11参照）。正規の登城路が確定している。しかし本丸の北側については大馬出が描かれ、慶長期の様相が引き継がれている。

次の段階で本丸が北側に拡張され、大馬出消滅することを考えれば、あるいは本丸南側の改造が完成し、北側の改修に取り掛かる直前の段階といえようか。そのように言い得るだけ、本丸南側は寛永期の様相に近づいている。

この第5グループ、すなわち「江戸始図」について、他の「慶長江戸図」と比して、上記のほかに注目すべき点がある。次に指摘しておきたい。



図9 「慶長江戸図」中ノ門付近部分
東京都立公文書館所蔵 (654-05-01-06)

図10 「江戸始図」 松江歴史館所蔵

- ① 第1から第3グループに属する「慶長江戸図」の形状はおおよそ八〇～九五cm四方のほぼ正方形に近い形状で、かつ文字情報の記載から古河市歴史博物館を除いて他は北西を天にして描いている。これに対して「江戸始図」は縦二七・七cm、横四〇・〇cmというおよそ四分の一程度の大きさであり、かつ方位も一八〇度回転させた南東を天としている。地図としての体裁は他の「慶長江戸図」と異なっている。少なくとも大きさの相違は、正確に「慶長江戸図」を写すという考えのもとに作成された写真ではない。すなわち『極秘諸国城図』の編纂という課程の中で作図であったことが関係していると考えられる。作図の背景が異なっている点に注目しておきたい。
- ② 描写のなかでは、二の丸¹⁷の壁面構造が相違する点に注目したい。「江戸始図」は石垣が黒太線で表現されるが、他の図では土塁など描写で石垣の記載をともなっていない。この点を評価すれば、二ノ丸が石垣化された段階であり、一連の「慶長江戸図」のなかでは最末期に位置づくことになる¹⁸。
- ③ 本丸富士見三重櫓下から中ノ門付近にいたるまで、本丸石垣下にあった堀が埋められ、のちの時代に二ノ丸と呼称される曲輪の拡張が計ら

図11 「江戸始図」本丸周辺 松江歴史館所蔵
* 図10とは180度回転させ、天地を入れ替え掲載。

れている。ただし、現状でも確認できる白鳥濠の形状ほど短い堀ではなく、図の水堀の両端は現状より長く続いている。

④ 以下の状況から写本の作成段階で、考証して制作した写真と考えられる。

① 「慶長江戸図」にみられる城門の注記であるが、「浅草橋」・「大橋」・「大手土橋」の記載が通説の場所とは異なる位置に記載されていた¹⁹。しかし、「江戸始図」では、この記載を省略している。名称と場所が不一致と判断されたためであろう。制作にあたって考証された結果と考えられる。

② 本丸内の輪郭だけを記した建物の記載が省略される。ただし一部については石垣と判断し、黒塗りで表現したらしい。石垣と建物との判別が難しい記載を判断したため、後述するように誤認と思われる描写が存在する。

以上の点を踏まえれば、「江戸始図」は『極秘諸国城図』の編纂課程に作成された、後の時代の考証図という性格が浮かび上がり、一連の「慶長江戸図」を参照しつつも、絵図の性格としては一線を画す絵図ということが出来る。

構造の状況から全体の「慶長江戸図」を位置づけたが、この構造を全体としてどのように考えるかを概観しておきたい。厳密に言えば、研究史が指摘するようにいずれの「慶長江戸図」も写真であり、情報の正確さにおいては課題を残す。しかし写された情報の共通性は尊重でき、この点を重視したことにより、以上のように一覧表に整理した分類ができると考えた。そして後の時代の大手筋の完成という結果論から評価すれば、グループの相違はそのまま第一段階から第五段階へという構造の年代の変遷として把握できることになる。

このように考えると、写真が制作される課程で利用した「慶長江戸図」の原図とは、単純に一枚だけではなく、段階的に存在した可能性が浮か

びあがる。推定の域を出ないが、少なくとも中ノ門の記載のあり方および上記①②③の相違を踏まえれば、写図には構造の変遷が反映されていることは間違いない。

つまり一連の「慶長江戸図」には、江戸城本丸の構造の変遷が描かれており、とりわけ大手門・内桜田（桔梗）門―大手三之（下乗）門―中之門―中雀（書院）門という登城路の確定の過程が段階的に示されていた。その年代は慶長十二年から本丸が拡張され北側の馬出が消滅する以前（小松説では元和八年（一六二二））かつ三ノ丸が石垣普請される以前である。そして、その期間が五段階で把握され、江戸城本丸の正規の登城路が確定する状況が示されている。江戸城の構造を考える上で貴重な絵図群と評価できる。

3 家康以前の登城路と正面

「慶長江戸図」の分析より、大手門・内桜田（桔梗）門―大手三之（下乗）門―中之門―中雀（書院）門という登城路の成立過程を確認したが、それ以前の大手についてはどのように設定されていたのだろうか。大手筋が変遷過程であり未完成であるので、その情報も「慶長江戸図」には盛り込まれているはずである。

そもそも大手筋を下った先にあるはずの江戸城下についてはどのように理解されるであろうか。その際にまず参照したいのは、玉井哲雄の研究である（玉井一九八六）。

玉井は草創期の近世江戸について、「中世江戸をなんらかの形で継承」しているとし、本町通り²⁰の町割り²⁰が正方形街区であることに着目した。それにより、「日本橋通りより本町通りが主要な街路」であると評価し、「中世江戸城と浅草を結んでいた『奥州道』が地形的にみて、ちょうどこの本町通りのあたり」と論じたのである。この本町通りが城下の幹線



図12 江戸時代初頭以前の江戸

道路であり、その通り沿いの「正方形街区を原則とする統一的な町割り」は慶長期以後に設定された」と論じた。すなわち徳川家康・秀忠期における城下町の中心をこの通り沿いに求めた。

この玉井説を基点として、家康の段階に至るまでの江戸の町と幹線道について論じたことがある（齋藤二〇一〇）。論証の重複は避けるが、主要な論点のみを記すと、以下のようになる。

当然のことではあるが、日比谷の入り江が存在する段階では日本橋を基点とする東海道とそれに寄り添う銀座界隈の城下町は存在し得ない。中世から近世にいたるまでの幹線は、渋谷から青山通りを東進し、赤坂御所内を通過して、江戸城外郭の喰違門・半蔵門を抜け、本丸北側を東に台地を下り、常盤橋に至り、先の本町通りに接続する道筋であった。東海道の南北方向に対して、東西方向の道筋が中世から江戸初期に至る江戸の幹線道であった。

そして、中世江戸の城下が平川であることは以前より知られていた。この平川の町場は平河門の付近で、先述の東西道と接する場所と推定された。およそ平河門の周辺であることは動かないだろう。この平川の町場は道筋に沿って東方向に展開し、永禄十一年には「江城大橋宿」が史料に登場する²¹。大橋の界隈が町場化していたことを示している²²。そして大橋宿のさらに東側の道統きは常盤橋門を経て先述の本町通りに繋がる。まさに十五世紀後半の太田道灌期江戸城下の平川の町場は、東西道に沿って拡張し、慶長期頃には本町通りにまで至ったと理解できる。

また平川の町場には、城下を構成する寺社があった。平河天満宮、平河山法恩寺（日蓮宗）、平河山浄土寺（浄土宗）、諏訪山吉祥寺（曹洞宗）などである。これらの寺社は幹線道が東西方向から東海道の南北道に変更され、新たな東海道沿いの城下が創出される際に、各所に移転した。旧来の平川の町場が解体されたことを示唆している。

すなわち、江戸初期までの幹線は東西道であり、城下は平川―本町通

り間であった。とするならば、必然的に江戸城の大手筋もこの道と町に接続することになる。「慶長江戸図」の段階にいたるまで、本丸において下埋門を中心とする南側と馬出群を構える北側の二方向の道筋が開いていた。この道筋・城下を考えれば、そのどちらが重視されるか、おのずと明らかではなからうか。北側に馬出群が構えられた時代的な必然性についてはさらに後述するが、幹線道と町場との位置関係から北側馬出群が江戸城本丸の大手に当たったと考えられる。

それゆえに、江戸時代初頭には徐々に北正面から南東正面（大手門・内桜田（桔梗）門―大手三之（下乗）門―中之門―中雀（書院）門という登城路）へと変更する段階が存在したことになる。

ところで、千田嘉博は「江戸始図」の記載、先述の千田論点②において、本丸南側の五連続外枅形を取り上げ、「江戸城の南側のいわゆる大

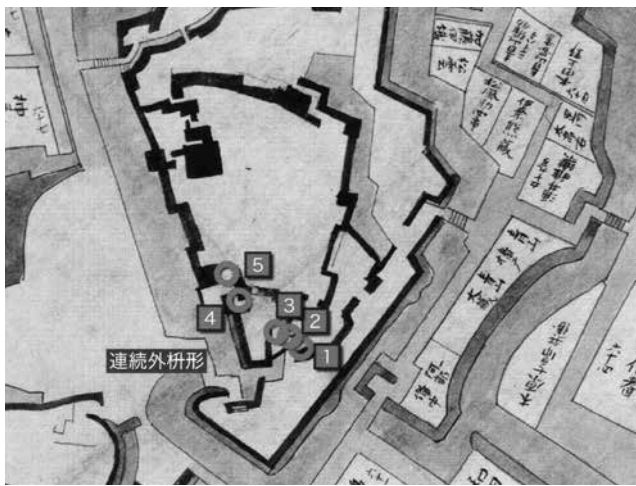


図13 「江戸始図」により判明した慶長期江戸城の5連続外枅形（千田2017より引用）

手筋の出入り口部分ですが、ここでは西国風の外枅形を、5段連ねていました」と評価した（図13参照）。この南側が大手筋ではないことは既に記したとおりであるが、さらに南側からの登城路も一連の「慶長江戸図」から確定することは難しい²³。しかし千田は「江戸始図」から五連続外枅形を取り上げ、軍事的な江戸城の姿を論じ

ている。

今一度、「江戸始図」を点検すると、千田の指摘する①・②・③の虎口は現時点でも存在する。加えて④と⑤については現状の本丸の西側星壁を共有する。したがって問題は④と⑤についての本丸内側の表現が妥当であるかどうかになる。「江戸始図」は③から⑤の間には黒塗りの太い線を描く。図ではこの太い線が④と⑤の虎口の評価に関わっている。千田が指摘するように、他の「慶長江戸図」が記載する建物等の記載については、建物であるのか、あるいは石垣であるかは不明確な点がある。しかし「江戸始図」では、作図過程での考察がなされ、建物と判断される表記を省略し、石垣と判断される表記のみを採用し、黒塗りで表現したと考えられている。その結果、千田は「江戸始図」に記載された黒塗りのラインを、本丸内部の南側を仕切る石垣のラインと判断し、④と⑤の虎口を設定したのだった。しかし、この石垣のラインと判断した黒塗りの太い線に相当する記載は、他の「慶長江戸図」には見られない。「江戸始図」のまさに考証によって追加した、「江戸始図」だけの描写ということになる。

先に、「江戸始図」は「本丸南側の改造が完成し、北側の改修に取り掛かる直前」であり、「本丸南側は寛永期の様相に近づいている」と指摘した。この評価に基づき、寛永期以降の江戸城本丸図と比較すると、当該の黒塗り線の場所には能舞台・鏡之間・御楽屋が建ち並んでいることが確認される²⁴。「江戸始図」の黒塗りの線は一連の建物の「く」の字の形状にも似る。どうやら「江戸始図」はこの建物群を黒塗りで表現したと考えられる。「江戸始図」の作者がどのような意図（あるいは誤認）でこの描写を行ったかの詳細は不明であるが、この表現をもつて本丸南側を仕切る石垣のラインとは判断することはできないことになる。したがって当該記載を虎口④と⑤と判断することも誤認と言わざるを得ない。千田が指摘する五連続外枳形は存在せず、この評価から論じ

られた軍事的な江戸城論は成立しない。

4 慶長十一年以前の江戸城

慶長十一年に始まる江戸城の大改修は石垣を導入した、將軍の城への変貌であった。とするならば、それ以前の江戸城はどのようなであったか。すでに天正十八年（一五九〇）の江戸入府以降の文禄期に徳川家康による修築が行われていることは知られている。しかしその工事の詳細については必ずしも明らかではない。少なくとも「慶長江戸図」にはその結果が反映されているはずであり、その様相を分析してみたい。

文禄・慶長期の豊臣系の城館の特徴の一つとして、中井均は大馬出があると指摘する。「豊臣秀吉が天正十四年（一五八六）、洛中に築いた聚楽第の平面構造を受け継ぐものである。聚楽第自体は文禄四年（一五九五）に徹底的に破城を受けており、その構造をすることはできないが、『浅野文庫諸国古城図』をはじめとする絵図と発掘調査の結果から、長方形の本丸と、その前面に馬出が附く構造であった。同年織田信雄によって築かれた清須城もほぼ同形態を示す。このプランを最も忠実に受け継いだのが天正十七年（一五八九）毛利輝元によって築かれた広島城である」と述べ、「近世城郭の流れとして聚楽第型がある」と論じている（中井二〇〇三）。

そもそも馬出とは、虎口の前面にあり、周囲を堀で囲まれた空間を指す。接続する主たる郭よりは面積は狭い。内外とは橋で連結され、馬出の外側に向けては虎口を構える。四周に堀を伴うことが原則であることから、横堀と土塁を多用する平城プランの城館に多く用いられるが、切岸と堀切を主要な要素とする山城プランの城館には見られない。

中井は聚楽第を基点に、影響をうけた事例として清須城と広島城を掲げた。豊臣期の馬出は基本的に大型の角馬出で、二ノ丸・出丸・曲輪な

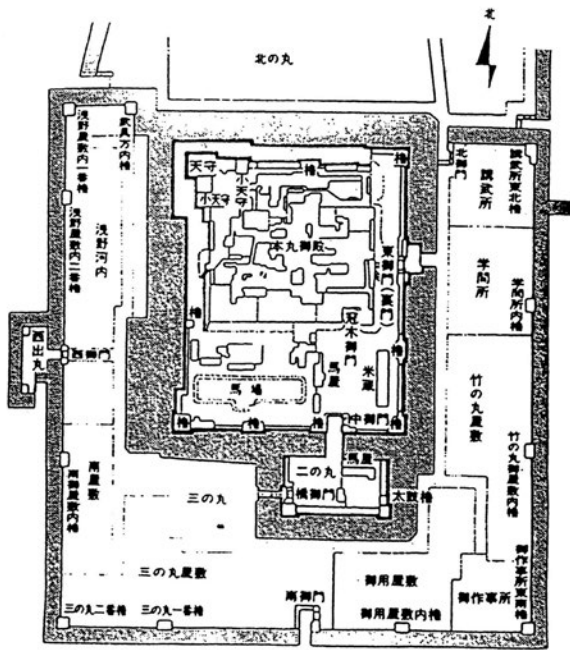


図15 広島城縄張図（中井2003より）

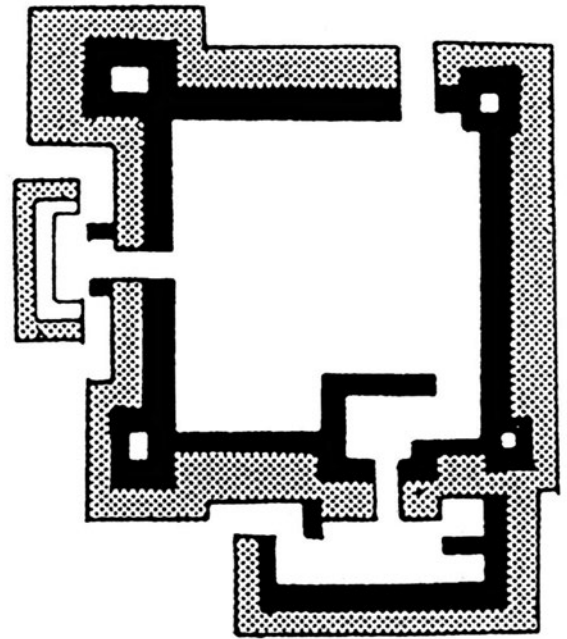


図14 聚楽第縄張図（中井2003より）

高岡城跡現況地形図



図16 高岡城跡現況地形図 高岡市教育委員会作成
（富山考古学会「越中の近世城郭—高岡城からみえてくるもの—《資料集》」2009）に加筆

どと呼称され、曲輪として空間が活用された。中井の提唱を受け、聚楽第型の構造は豊臣大名での展開が考えられており、その事例は多い。以下でいくつかを確認してみたい。

（富山城）富山県富山市

加賀藩の支藩である富山藩の主城。方形に本丸は松川を北側に背負い、残る三方向に虎口を開き、大馬出を付属させる。それぞれ東出丸・西出丸・二ノ丸の呼称がある。聚楽第と同様に主郭の三方向に大馬出を配置し、酷似した構造を呈する。

天正七年（一五七九）に佐々成政が入城以後、慶長二年（一五九七）に前田利長がはいり、同十年には藩主を隠退した利長が富山城を修築して居城とした。全体が整えられたのはこの頃であろう。

（高岡城）富山県高岡市

およそ方形の本丸の南北に虎口を設け、馬出を配置する。そのうち南

側の大馬出が二ノ丸と呼称された。他方の北側には小さめの角馬出を配置する。また東側には本丸側に虎口をとまわらないため馬出ではないものの、明丸と呼称された方形の曲輪が配置された。この明丸が本丸と虎口・橋で連結されると、富山城に似た三方向に大馬出を配置するプランになる。おそらくは計画変更で二方向だけとなったのであろう。

また二ノ丸と明丸、北側の角馬出と明丸も角馬出で連結される。方形の本丸の外周に多数の馬出を配置、連結し、本丸を囲みこむ構造となっている。

慶長十四年（一六〇九）、富山城は類焼により、前田利長が高岡城を築城した。一説に設計はキリシタン大名の高山右近という。

（鶴ヶ城） 福島県会津若松市
おそらく戦国大名蘆名氏の黒川城主郭をそのまま転用したのであろうか、丸みを帯びた本丸を中心に尾根上に二ノ丸・三ノ丸が配置される。本丸内部には仕切りが設けられ、天守が聳える。この本丸の北および西方向に北出丸・西出丸と呼称される大馬出が普請されている。

北出丸と西出丸が普請された年代は明らかではないが、天正十八年（二五九〇）の豊臣秀吉の奥羽仕置によって蒲生氏郷が入城した。普請はそれ以降であろう。

（箕輪城） 群馬県高崎市

城館の最初の築城の年代は明らかでないが、一五〇〇年頃と考えられている。その後、武田信玄が上野国の拠点とし、さらに滝川一益が数ヶ月、さらには北条家一門の北条氏邦が八年間程度にわたって活用した。小田原合戦後には、徳川家が関東に入部し、秀吉の命により井伊直政が入城した。直政は在城八年で箕輪城を廃城とし、高崎城に移った。したがって現状の遺構は井伊氏段階のものと考えられ、発掘調査によっても下層に北条氏邦期の遺構が確認されており、井伊直政による大改修が想定されている。



図17 箕輪城測量図 部分
（『史跡箕輪城跡調査報告第8集』
高崎市教育委員会 2008）より

本丸を中心に南・北・西の三方向に馬出を配置する。このうち南側は小型の馬出（あるいは外枳形）である。このさらに南側に二ノ丸・大馬出を直線状に配置する。二ノ丸も大きさや形の上では大馬出と解釈することも可能である。この場合、大中小の角馬出を直線状に三連結する形を採用する。残る北には御前曲輪、西には蔵曲輪を配置する。蔵曲輪は自然地形が影響したのであろうか、形状は不整形であるが、こも馬出であろう。本丸との連絡は発掘調査により木橋の痕跡を確認した。また北側の御前曲輪とは門と土橋で連結するが、御前曲輪から外側への出入り箇所は確認されていない。おそらくは西側への連絡は木橋ではなかろうか。

（小田城） 茨城県つくば市

方形の主郭から南・北・東の三方向に虎口を開き、その外側に木橋で連結して中規模程度の馬出が構えられた。南・北二箇所の馬出は角馬出であるが、東側は自然地形を利用した不整形な空間であり、機能的には虎口前の空間であり、馬出に類する空間であるが、厳密に言えば外部に

向けて橋をともなっておらず、馬出の形状となっていない。

南北朝時代に北畠顕家が『神皇正統記』を書いた場所として著名な城である。歴代小田氏の本城であった。戦国時代末に小田氏治が小田城を失って以後、佐竹氏が管轄する城館となり、慶長七年（一六〇二）に佐竹家が秋田転封となるに及んで、廃城となったと考えられている。南側の虎口は最終段階の改修であることが確認されており、馬出を配する構造は佐竹段階での改修と考えられている。

（篠山城） 兵庫県篠山市

西国に睨みをきかせる位置に天下普請により築かれた城館。慶長十四年（一六〇九）に着工し、竣工したとする。

基本的に平城プランで築かれるが、地形的には小山を利用して、方形に二重区画をめぐらし、その外側の南・北・東の三方向に馬出を配置する。

（名古屋城） 愛知県名古屋

尾張徳川家の名古屋城は慶長十五年（一六一〇）に、徳川家康が築城を決定し、同年のうちに完成したという。この城の特徴は本丸にあり、同所が將軍家の空間で、上洛の宿所として確保されていた。そのため二ノ丸が尾張徳川家の政庁であった。

本丸は方形に構えられ、南と東に大馬出が構えられる。北西方向は名古屋城普請の課程で変更が重ねられたようで、天守の中から外へ通行することを考えた時期もあった。結果的にこの方向に大馬出は普請されなかったが、御深井丸が大馬出の機能を吸収していたのだろう。

以上、各地の城館の馬出を概観した。このうち富山城・高岡城・鶴ヶ城がいわゆる豊臣大名による普請。箕輪城・小田城は文禄期頃に普請された東国の城館。篠山城と名古屋城は江戸幕府による天下普請による築城である。このように、文禄期から慶長期にかけて、主郭の二ないし三方向に馬出を配置する平城プランが流行していたことを知ることができる²⁵⁾。

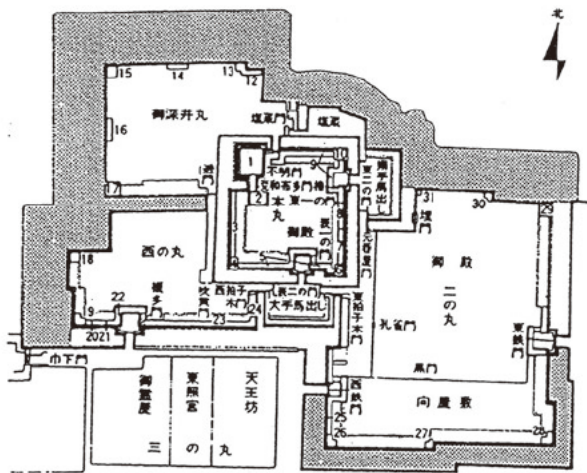


図19 名古屋城縄張図（中井2003より）

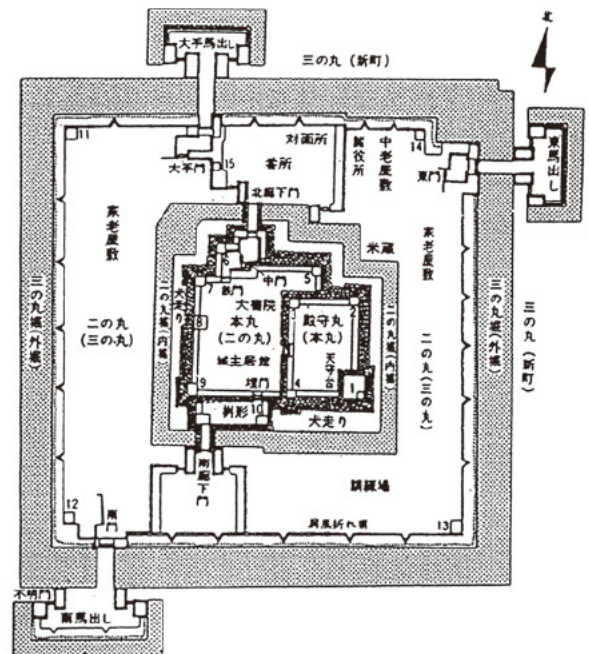


図18 篠山城縄張図（中井2003より）

この視点で「慶長江戸図」を見るとどうであろうか(図20参照)。まず「江戸始図」に関する千田論③でも指摘するように本丸北側に連続する馬出が存在する。形状はゆるやかなカーブを描くが、おそらくは自然地形の影響なのであろう。この点は先に例示した同時期の徳川領の箕輪城で見られた点と共通する。



図20 第1グループ「慶長江戸絵図」 本丸周辺 (東北大学図書館狩野文庫・3-8827-1)

ところで、本丸の入口は南北二ヶ所として議論されてきたが、南側の下埋門付近に馬出の指摘はなかった。そこで再度「慶長江戸図」を読み込むと、下埋門の前面、富士見三重櫓の下の空間が三角形の大馬出であることに気づく。馬出から西ノ丸側は蓮池門が構えられている。また大手三ノ門の方向へは虎口は設けずに細長い帯曲輪が続く。絵図から帯曲輪と本丸墨壁の間には、白鳥濠に続く空堀あるいは水堀が存在したことがわかる。

南北に馬出を配置し、両者の間、のちに二ノ丸御殿が営まれる付近は、不整形ながらやや広さのある空間があり、高岡城の明丸を思わせる。南北の馬出をつなぐ役割が期待されていた空間だったのであろう。

すなわち、「慶長江戸図」が描く本丸周辺はまさに文禄・慶長期に流行した築城術を踏まえての構造であったことが浮かび上がる。徳川家康が行った文禄期の普請によって整えられた構造と考えられる。南北の大馬出を比較するならば、三角形の大馬出が一つの南側に対して、馬出を重ねて厳重な構えを施す北側は、まさに江戸城の正面の装いであった。このことが再度確認できるのではなかろうか。

そして、「江戸始図」の段階では本丸南東壁に面したの堀が埋め立てられている。これは大手筋の確定とかわるのであろうが、この埋め立てにより、三角形の大馬出は消滅する。いわば、江戸城では豊臣期の馬出を通過する登城路から、徳川期の中雀門に至る登城路へと変更されたことになる。また後年に本丸北側の馬出群も本丸拡張で姿を消す。江戸城は徳川家康による豊臣期のスタイルと決別し、徳川秀忠による徳川將軍の城へと転換する。この過程を示すのが「慶長江戸図」の時代だった²⁶。

ところで、小松和博は江戸城の曲輪の呼称について、「なお毛利家文書は、同家が『二の丸』の助役にあたったことを伝えるが、具体的にはそれがのちの三の丸の内桜田門であるところをみると、後年の三の丸が

この当時まだ二の丸と呼ばれていたことがうかがえる」、また『武州豊島郡江戸庄図』にかかわり「なおのちの西の丸下は、この図ではまだ『三之丸』と書かれている。（中略）寛永中頃以降は旧二の丸が新三の丸となるのであるが、それにもなつて西の丸下も名称が変わつたと思われる」などと指摘する（小松一九八五）。旧二ノ丸（新三ノ丸）と本丸の間に、新たに新二ノ丸が創出されたことを示唆している。このことは南側三角馬出と本丸東側帯曲輪が、本丸・新二ノ丸間の堀の埋め立てによって長く続く曲輪になったこととかわる。その長く続く曲輪はさらに広い空間を指向し、さらに寛永期の二ノ丸拡張に結びつくことになる。したがって、本丸・新二ノ丸間の堀の埋め立て以前と以後では、当該付近の空間の考え方が大きく変わることになる。堀の埋め立て以前の二ノ丸の間は、南北の馬出とそれをつなぐ帯曲輪という考え方の構造であつたことを裏付けている。

5 天守と殿舎

「江戸始図」を含め「慶長江戸図」から、慶長期の江戸城本丸の建築物について、次の二点の検討を行つてみたい（図20参照）。

まずは天守である。千田嘉博は江戸城の慶長期の天守について、以前に次のような主張をした（千田二〇〇〇）。「天守aの北側では小曲輪fを囲んだ塁線（多聞櫓）と櫓や門が認められ、天守曲輪に相当する本丸詰の丸が構成されていた」、「いくつかの櫓と天守が連立する景観」と、大天守が単独では存在しないと指摘していたのだった。

その後、「江戸始図」の読解から慶長期江戸城の天守について説を深めている（千田嘉博・森田知範二〇一七）。「本丸内部で第一に注目すべきは天守群です。現在の江戸城の本丸は中に天守台だけがぼつんとありますが、「江戸始図」が描いた慶長期の江戸城では、連立式の天守群を

構成していて、想像を絶した堅固な構えになつていたと確認できます」、「慶長期の江戸城の大天守が単立したのではなく、姫路城のように連立式天守であつたと確実になつたからです」と述べている。

しかし上記①②に指摘したように「江戸始図」には誤写がある。その一つが天守の記載である。大天守西側に方形の黒塗り四角を記載し、櫓が存在すること示唆する描写がある。この記載から千田は連立式天守と評価した。しかし、「江戸始図」以外の一連の「慶長江戸図」には本丸西側塁壁に大天守と連結する小天守のような表記はない。元和度天守は場所を変えての建て替えと考えられており、この記載を元和度天守であるとは読めない。また「江戸始図」から小天守だけがこの時期に新規に建てられたと考えるのは、写図であることもあり、判断にリスクがある。むしろ他の写図すべてに記載がないことを重視とすれば、当該地に小天守の存在を認めることは難しいと考えるべきであろう。千田が主張する「姫路城のように連立式天守」すなわち3つの小天守が連結するような連立式天守群の存在は否定されることになる²⁷。千田の主張は「江戸始図」の誤写を論拠にしていると言わざるをえない。

次に「慶長江戸図」の史料的な性格にかかわるので、本丸殿舎について触れておきたい（図20参照）。

「江戸始図」を除く「慶長江戸図」には南北に四列の殿舎群が描かれる²⁸。この殿舎群について『日本名城集成 江戸城』の巻頭図版の解説で次のように触れられる（村井編一九八六）。「当図には殿舎名は記されていないが、この殿舎の輪郭が単線で描かれている。『御本丸』の文字の上から南へ1列に並んだ3つの殿舎と、その南端の殿舎の東隣にある殿舎は対面のための殿舎群であろう」と触れ、さらに「先の対面のための殿舎群の西側の正方形が、天守と考えられる」と説明を付している。

四列のうち西側が正方形の天守と推定されるものであり、中央西側は「南へ1列に並んだ3つの殿舎」と触れられた殿舎で、「その南端の殿舎

の東隣にある「殿舎」とあるのが、中央東側の列の南端である。中央の2列の建物群は、その位置や形状から、後の時代の御座の間・黒書院・白書院・大広間・御玄関・遠侍に関連する。すなわち江戸城本丸の中枢が出揃っていることになる。

おそらく文禄期に建築された殿舎は北側の馬出群を経て本丸内部に入り、殿舎群の東側もしくは西側から建物内に進入していたと予想される。よって、南面する玄関との関連から記載する建物群が文禄期に遡って建築されていたとは考えにくい。したがって、慶長十一・十二年の工事で建築されたと考えられる。しかしその段階では大手筋が完成しておらず、現実的には北を正面とした段階だった。南端にある玄関と遠侍という位置は機能的な配置とは言えない。

そもそも「慶長江戸図」の本丸が北向きである、かつて読解できなかった原因の一つは、馬出群を通過した後、どのような経路を辿り、殿舎に入ったかが理解できない点にある。その原因は殿舎の配置が将来の大手筋と関係しているためであった。つまり「慶長江戸図」記載の本丸殿舎は、中雀（書院）門を正面とする大手筋の完成に先立って、完成していたことになる。したがって、「慶長江戸図」の殿舎群の記載は、計画の順序で本丸中枢建物が建築されたためと考えるか、あるいは後年の状況をスライドさせて絵図に記載したためのどちらかということになる。とりわけ後者であるなら、天守の位置の理解にもかかわる大きな問題とある。今後の課題として確認しておきたい。

慶長期本丸南側の通路が未解明である点も含め、本丸内部の様相にはまだ解明すべき課題がある。同時にこの点はそのまま「慶長江戸図」の記載の課題でもある。あるいは「江戸始図」の制作者は、「慶長江戸図」が持つこのような問題を認識したため、不明確な描写を省いたのかもしれない。この問題も「江戸始図」発見の成果のひとつであろう。

おわりに

「慶長江戸図」を史料群として捉え、検討した結果、江戸城本丸は慶長期以前においては北側が大手であったと指摘した。その後、本丸の向きが変更され、かつ登城路を設定していく時期が慶長十二年以降の「慶長江戸図」の時代であった。いわゆる近世の江戸城の登城路が確定するのは、第4グループが描く様相、本丸北側の馬出群が消滅していない段階であり、本丸が拡張される以前である。小松の説に依拠すれば、その年代は元和八年（一六二二）に近い頃となる。すなわち寛永期を待たずして江戸城本丸南側は登城路を含めて完成し、続く本丸拡張をもって北側を正面とした馬出群などの諸施設は消滅したということになる。

またこの過程は北側および南側の存在した大馬出が消滅する過程である。豊臣期に流行した虎口形式であった大馬出をともなった江戸城本丸の南北の通路は、豊臣期の時代色を消し去って行った。その後の徳川將軍家の城へと生まれ変わった江戸城の虎口は、大馬出を配置したものはなく、各所に構えられた高麗門と櫓門の組み合わせによる枳形門だった。

ところで、論じてきた大手筋の北側から南側への変更は、さまざまな背景が予想される。まずは建築物として日当たりから北向きを忌避した可能性。そして中世以来の東西道の幹線から日本橋架橋による南北道の新しい東海道へという幹線道の変更。それにともなう平川と本町通りに所在した城下の解体と東海道沿いの新しい城下町の新設という変化。以上のように大手の変更は建物建築から都市計画までの、ミクロからマクロへの種々の要因が輻輳して関連している可能性が高いことが考えられ、近世初頭の都市江戸の大改造の一部と評価できることになる。

千田は「江戸始図」の分析の締めくくりとして、「家康は万が一の場合、豊臣の大軍を江戸城に迎えて戦わなくてはならない可能性を考え、強力

な軍事機能を備えた江戸城を築きました。またそうした理由には、戦国時代を生き抜いてきた大名たちが驚くほどの要塞として江戸城を築くことで、大名が徳川と戦おうとする気持ちを戦う前にくじけさせる意図があったに違いありません。慶長期江戸城は、豊臣の力と権威を徳川が圧倒するという、家康の強い意志によってできた城でした」と結論づける（千田二〇一七）²⁹。多分に主観的な表現ではあるが、本稿の分析によれば「江戸始図」にかかわる千田説の多くは成り立たなかった。したがって「豊臣の大軍を江戸城に迎えて戦わなくてはならない可能性を考え」という前提に基づく千田論の結論も否定されることは明らかであろう。

そもそも、「江戸始図」の時代背景について、対豊臣戦という戦時状況に重点をおく千田説³⁰は、江戸城の正式な登城路の確定および江戸城と都市江戸の形成過程におく本稿の立場とは歴史認識が著しく相違する。

本稿作成にあたり杉本史子・小粥祐子両氏よりご教示を頂いた。

また「慶長江戸図」の所在については、東京大学史料編纂所画像史料解析センター「江戸城図・江戸図・交通図および関連史料の研究」・科学研究費補助金・基盤研究（C）「近代国家模索の歴史的前提」（17K03094）による調査成果の提供をうけた。

【註】

1 「慶長江戸図」は所蔵機関により、「慶長江戸絵図」「慶長年中江戸図」「慶長十三年図」などとさまざまな名称で呼ばれている。本稿においては慶長期の江戸城を描写する一連の絵図を、概念として表現する場合は「慶長江戸図」の呼称を使用する。

2 東京都江戸東京博物館の企画展、NHKスペシャル関連企画「大江戸」展（会期二〇一八年四月一日（日）から五月十三日（日））に「江戸始図」を含む「慶長江戸図」を展示した。

3 千田嘉博は、脚注において「本節で明らかにしたように当該期の城郭プランと

してふさわしい内容で出入り口、天守曲輪など要所をおさえている。同時期の城郭プランとも密接な関連をもっており、まったくの後世の空想であるとは思えない。記載に粗密はあるものの一定度信頼してよい。」と述べている（千田二〇〇〇）。前段の本節に明らかにした出入り口と天守曲輪については本稿で指摘するが誤解を含んでいるものの、「同時期の城郭プランとも密接な関連をもっており」とする点については筆者も賛意を持つ。

4 千田嘉博は、「城道はこの門（齋藤註…下埋門）を経たのち、正面の石垣に遮られて右と左にターンした。左に曲がると長大な虎口空間を備えた外枡形出入り口5が控え、右に曲がると出入り口6がそびえていた。出入り口8は本丸中心部へ導く最後の城門で、城内でも格式が高い重要な門のひとつであったと考えられる。」（千田二〇〇〇）なお、番号表示の位置については原典を参照されたい」と出入り口8に本丸の中雀門（書院門）の前身の門にいたる道を想定し、「格式が高い重要な門のひとつ」と述べていた。「江戸始図」では中雀（書院）門を明確に描くが、この門と五連続外枡形門の道筋と関連についての指摘はない。

5 千田嘉博は「北側は本丸の搦手に相当する」と述べ、「壮大な重ね馬出しの空間として構成されていたことが判明する。馬出しは織豊系城郭において外枡形とともに積極的な出撃を実現した、もともと完成された出入り口の形態であった」と以前に評価している（千田二〇〇〇）。したがって、この論点は「江戸始図」発見以前から指摘されていたことになる。

6 そもそも千田の外枡形に関する定義が不明である。私見では方形の空間に二つの門が構えられ、かつ内側を除く三辺が堀に接するなど外側に面し、残る内側は門で仕切られるものの地続きとなる、方形の虎口空間と理解している。少なくとも千田が指す虎口は通路を前提とするものであり、意識的に確保した方形の空間はなく、かつ虎口の三辺すべてが外側と接してもいない。私見の外枡形とは合致しないようである。

7 これ以外にも慶長期の江戸の状況を考察した『慶長年間江戸図考』の冊子に掲載される図がある。今回は絵図の形態に注目していることもあり、かつ記載がやや簡略化されることもあり、除外した。なお『慶長年間江戸図考』の写本は、国立国会図書館、国立公文書館、早稲田大学図書館、天理大学附属天理図書館ほか各所に伝わる。

8 現在、本図には別に、装丁を同じくする『慶長年中江戸図考』が付属する。『燕

- 石十種』所収『慶長年間江戸図考』と比較して、前半部に太田道灌以来の江戸城の歴史について、歴史叙述と史料引用がなされ、異なった内容になっている。ただし、冊に所載する絵図は『燕石十種』と同じく、第4グループに関連する本丸を含む東半分の地図である。したがって冊には内容的に本図との関連がみられない。結論として、本図と『慶長年中江戸図考』は伝来の過程で一体として処理されたと推測される。
- 9 『古板江戸図集成』第一巻（古板江戸図集成刊行会二〇〇〇）は本地図を所載し、『慶長十三年江戸図』を名称とする。
- 10 『江戸絵図』と同じ仕様の表紙・裏表紙が付く。内容は『慶長年間江戸図考』とは一致せず、絵図所載の五二名の情報を、上段に略歴、下段に名字・仮名・実名で記載する。
- 11 二舗一組の地図であり、表紙は同一の仕様であるが、本紙の紙質・筆致・折り方が異なり、写図作成の経緯を異にする二枚の絵図が一組になっていると判断される。ただし、全く伝来の経緯を異にする地図が取り合わさったか、あるいは一方の欠損等により一方を新たに作成したかは判断できない。
- 12 なお、飯田龍一・俵元昭は『江戸図の歴史』において、独自の分類を試みている（飯田・俵一九八八）。八点の「慶長江戸図」を慶長十三年と慶長十九年に二分割する分類である。このうち、慶長十九年に分類するものは第2グループの東京都立公文書館所蔵と第4グループの東京都立公文書館所蔵および東洋文庫所蔵の二点、さらに表中に収めなかった『慶長年間江戸図考』の二点である。東京都立公文書館所蔵「慶長江戸之図」（請求番号894050105）は第2グループに分類するもので、これだけは意図が不明であるが、あとの四点は「慶長江戸図」の右半分、東側だけの写図であるので、おそらくは全図を慶長十三年に右半分だけの図を慶長十九年に分類したのではなからうか。
- 13 ただし、下埋門をこの時期の南側正面門と評価することが可能だとしても、その後の本丸殿舎にいたるルートは確定できない。この状況は第3グループにいたるまで変わらない。埋門から本丸内部に至り、本丸南部に描かれる二重線で描かれたY字状の表現は、本丸内部の高低差を考えると、おそらくは仕切り壁と推測されるが、方形の区画につながらないこの線状の表現はあまりにも不自然であり、解釈ができない（図3・5・7参照）。埋門から内部に至る道が明確でないことは登城路ではあるものの、象徴性が期待された道ではなかったことを示唆しているのではなからうか。本丸内の建物の表現が不明確であるこ

- ととあわせ、南側登城路の復元には困難がある。今後の課題である。
- 14 『譜牒余録』（巻之二十五 藤堂和泉守 附家臣）には「慶長十二年、右和泉守、江戸御城ノ御殿主并追手中之御門之縄張、被 仰付候事、」の記載が見られる（内閣文庫影印叢刊『譜牒余録』上七一頁）。この点を重視すれば第3グループは慶長十二年以降となる。都立中央図書館所蔵図が「慶長十三年江戸図」と題される意味も重要となる。原図は変遷の段階が把握できるように、年次ごとに保持されていた可能性と関わる。
- 15 この点について、千田嘉博は註4に紹介したように「中心部へ導く最後の城門で、城内でも格式が高い重要な門のひとつ」と述べている。しかし絵図の描写から門として確定している状況は読み取れず、結果論からの評価とししか理解できない。そもそも千田は「江戸始図」から本丸南側の五連続外枳形を大手筋と評価しており（千田・森田二〇一七）、自説のなかで矛盾している。
- 16 『燕石十種』第六巻（中央公論社一九八〇）所収。
- 17 後述の呼称の変化を踏まえれば、新二ノ丸の空間。
- 18 ただし三ノ丸（旧二ノ丸）が石垣化されていない。この点を重視すると、あるいは元和六・七年の普請が完了していない段階と考えることができるかもしれない。
- 19 一連の「慶長江戸図」では大手三之（下乗）門を「大手土橋」とし、以下、大手門を「大橋」、常盤橋（大橋）を「浅草橋」と記載する。この点は、一連の「慶長江戸図」が等しく記載することから、あるいは原図段階での誤認である可能性も残すが、おそらくは後に名称変更が行われたためと考えられる。例えば、天理図書館所蔵『慶長年間江戸図説』（請求記号894050105）は『慶長年間江戸図考』の写本であるが、所載の「慶長江戸図」（第4グループに対応）にはそれぞれに「今下乗」・「今大手」・「今常盤橋」と朱書による注記がある。また東北大学図書館狩野文庫本を除く第2グループの絵図には「浅草橋 今常盤橋」の記載がある。また玉井哲雄は常盤橋門の外側に慶長期の町割りを分析した（玉井一九八六）。さらに詳細は別途論じる必要があるが、東京駅八重洲北口遺跡や移転前の吉原所在地は都市の周縁部とかかわり、「大橋」について名称変更があったことを考えさせる。おそらくは浅草橋門の名称から考えられるように、惣構えの普請によって外郭が変更されたことが原因となり、一連の名称変更が生じたことが予想される。
- また名称変更を踏まえると、戦国期段階の「高橋」や「大橋」の位置や関係

についても再考を要することになる。

20 奥州街道筋の通りで常盤橋門から浅草橋門にいたる。

21 （永禄十一年）極月十七日付・北条氏政条書（『北区史』資料編 古代中世1・四二一）。

22 通説では後に常盤橋門が大橋に該当すると考えられている。しかし既述のとおり「慶長江戸図」の段階では大手門の場所が「大橋」と記載されていた。したがって、「江城大橋宿」とは大手門から常盤橋門至る区間を中心として考える必要がある。

23 「江戸始図」を除く「慶長江戸図」には、現存する慶長期と推定される下埋門付近の石垣付近が、正確に描写されていないか、あるいは全く描かれていない。したがって、絵図には南側の道筋は正確には描写されていない可能性が高い。

24 能舞台・鏡之間・御楽屋の建ち並ぶ様相は江戸城本丸表の建物を記載する多くの絵図で確認できるが、この建物群以南の富士見櫓まで記載する絵図は多くはない。考証の過程では、都立中央図書館所蔵「江戸城御本丸御表御中奥御大奥総絵図」（平井・伊東一九九二 所載番号二八）と対照した。

25 この起源の問題については、『歴史家の城歩き』（齋藤・中井二〇一七）を参照された。

26 秀忠期以降、江戸城の門は高麗門と櫓門を組み合わせ、内部に方形の空間をもつ枳形門に形式化していく。「慶長江戸図」には定型化した枳形門を見ることができない。いわば、虎口の考え方が、大馬出から定型化した枳形門へと移り変わる過渡期に位置する。

27 ただし、大天守と連結した小天守、さらに櫓門、多間櫓による天守曲輪が存在した点は想定できる。

28 ただし第4グループは天守と推定大広間・白書院・黒書院が一行に並び、全体として天守を含む建物群が方形に建ち並び、内部に中庭を有する配置に描かれ、一連の絵図とは異なる配置となる。

29 引用箇所について千田嘉博は、「家康は軍事要塞としての城の機能よりも、城を政治の拠点として機能させることがより重要と判断して、戦うための天守曲輪ではなく、広大な本丸御殿の面積を確保して政治機能を強化するように舵を切ったのだ」と論じている（千田二〇一七）。

軍事要塞から政治機能へという転換は本稿の枠組みと等しいが、既述のように千田が「江戸始図」で論じたことは「強力な軍事機能を備えた江戸城」であり、

機能の転換には触れていない。とりわけ「戦うための天守曲輪ではなく、広大な本丸御殿の面積を確保して政治機能を強化」とする点については、その転換が家康の判断であるとする論証も説明がなく、意図が不明である。

さらに言えば、引用冒頭の「家康は」は「秀忠は」の誤認（あるいは誤記）ではなからうか。まず千田論の枠組みで考えた場合、「家康は」では矛盾をきたすのは明らかであろう。そして時代背景を踏まえれば、慶長期の改修は秀忠が征夷大將軍就任以後であり、江戸城主であった時期である。この慶長期以降で寛永期にいたる大改修が今にいたる江戸城を生み出した。変化の時期は秀忠以降なのである。このことを考えても「家康は」は誤認と考える。

『東京市史稿』皇城編は、徳川家光への代替わりに際し、「秀忠、江戸城二主タル者十九年。其間慶長十一年、十二年、十九年、及元和六年、八年ノ増築修営ヲ為シ、以テ大ニ江戸城ノ規模ヲ定ム。斯クテ元和九年癸亥七月廿七日丙辰、將軍職ヲ子家光ニ譲ル。」（割注省略）との項文を立てる（東京市役所一九一一）。

30 千田嘉博は「本丸内の天守曲輪の存在と合わせて、実戦に機能することが第一に考えられていた」とのべ、当初より実戦機能を重視していた（千田二〇〇〇）。

【参考文献】

- 飯田龍一・俵元昭『江戸図の歴史』（築地書館株式会社一九八八）
 小松和博『江戸城 その歴史と構造』（名著出版一九八五）
 古板江戸図集成刊行会『古板江戸図集成』第一巻（中央公論美術出版二〇〇〇）
 齋藤慎一『中世東国の道と城館』（東京大学出版会二〇一〇）
 齋藤慎一・中井均『歴史家の城歩き』（高志書院二〇一七）
 齋藤慎一・向井一雄『日本城郭史』（吉川弘文館二〇一七）
 千田嘉博『集大成としての江戸城』（『織豊系城郭の形成』東京大学出版会二〇〇〇）
 千田嘉博・森田知範『江戸始図でわかった「江戸城」の真実』（宝島新書二〇一七）
 千田嘉博『「江戸始図」の歴史的意义』（松江城歴史的价值発信事業実行委員会・千代田区『松江城と江戸城―国宝になった城と天下人の城―』展図録二〇一七）
 玉井哲雄『江戸―失われた都市空間を読む』（平凡社一九八六）
 東京市役所『東京市史稿』皇城編（博文館一九一一）
 中井均『加納城の構造―特にその平面形態について―』（『史跡 加納城跡』岐阜市教

育委員会二〇〇三)

野中和夫「江戸城―築城と造営の全貌―」(同成社二〇一五)

野中和夫編「ものが語る歴史12『石垣が語る江戸城』」(同成社二〇〇七)

平井聖監修・伊東龍一編集「城郭・侍屋敷古図集成『江戸城I〈城郭〉』」(至文堂一九九二)

村井益男「中公新書45『江戸城 将軍家の生活』」(中央公論社一九六四)

村井益男「江戸と江戸城の歴史」(『日本名城集成江戸城』小学館一九八六)

村井益男編『日本名城集成江戸城』(小学館一九八六)

歴史群像名城シリーズ『江戸城』(学習研究社二〇〇〇)